



H3ロケット打ち上げ成功 6つの小型衛星を軌道に投入 JAXA

2026年6月12日9:47
(2026年6月12日20:19更新)

宇宙

去年の打ち上げ失敗からの再起をかける日本の主力ロケット「H3」の6号機が、12日午前、鹿児島県の種子島宇宙センターから打ち上げられ、計画どおり6つの小型衛星を軌道に投入して打ち上げは成功しました。

記事後半では、JAXAの会見動画(26分59秒)も掲載しています。

NO
PRINTING

失敗からの再起をかけるH3ロケット6号機 きょう打ち上げへ

これまでの経緯や、専門家の見解などを詳しくまとめています

H3ロケット6号機は、12日午前10時前、3基のメインエンジンに点火され、種子島宇宙センターの発射台を離れました。



JAXA = 宇宙航空研究開発機構によりますと、ロケットは計画どおり順調に飛行し、およそ15分後に高度580キロ付近で無事、目標の軌道に到達したということです。

その後、6つの小型衛星を軌道に投入し、打ち上げは成功しました。

H3ロケットは去年12月の打ち上げに失敗していて、JAXAは失敗の原因となった衛星を載せる土台を補修し、およそ半年ぶりに打ち上げを再開させました。

今回打ち上げられた6号機は、補助ロケットを使わない「30形態」と呼ばれる新しい形態の試験機で、失敗からの再起をかける打ち上げに注目が集まっていました。



打ち上げ後の会見でJAXAの山川宏理事長は「去年12月の打ち上げ失敗を厳粛に受け止め、信頼回復を念頭に徹底的な原因究明、対策に全力をあげてきた。日本のロケットがより着実で、高い信頼性と国際競争力を発揮できるよう、気を引き締めてこれからも取り組んでいく」と話しています。



去年12月の打ち上げ失敗後、原因究明と対策に取り組んできたJAXA＝宇宙航空研究開発機構の有田誠プロジェクトマネージャは打ち上げ成功後の記者会見で「失敗から半年がたち、短いようで長

い半年だったが、たくさんの方の協力を得てここまで来ることができた。なんとか達成できてまずはほっとしている」と振り返りました。

その上で「今回の打ち上げには、失敗からの再起に向けた挑戦と、新しい技術への挑戦という2つの意味があると言ってきた。新しい技術への挑戦については、詳細なデータ分析が必要だが一定の成果が得られたのではないかと考えている。一方で再起に向けた挑戦については、実用衛星の打ち上げに向けてまだまだやらないといけないことがある。H3を事業の軌道に再び乗せていくために気を引き締めてこれからも取り組んでいく」と話していました。

JAXA会見動画【26分59秒】



※データ放送ではご覧になれません

種子島宇宙センターでは関係者が拍手で喜び合う



種子島宇宙センターのプレスセンターでは、JAXAなどの関係者が集まり、H3ロケット6号機の打ち上げの状況をモニターを見上げて確認していました。

そして、H3ロケットが計画どおりに飛行し、打ち上げからおよそ15分後に目標の軌道に到達したことが確認されると、関係者は安どした様子で拍手をして喜び合っていました。

なかには、目に涙を浮かべている人もいました。

大勢の人たちが打ち上げを見守る



発射場からおよそ6キロの場所にある鹿児島県南種子町の長谷公園には大勢の人たちが訪れました。

打ち上げを前に、種子島の西之表市から家族で来た30代の女性は、「打ち上げを見るのは初めてで、わくわく、ドキドキしています。成功してほしいと願っています」と話していました。

また、町内の小学校に通う児童は、「楽しみです。前に打ち上げが失敗したので成功してほしいです」と話していました。

そして、ロケットが打ち上げられると集まった人たちが上昇していく様子を見上げ、拍手を送っていました。

今回打ち上げられたH3ロケットは補助ロケットを取り付けない新しい形態の試験機で、町内から訪れた60代の女性は、「打ち上げは何十回も見ていますが、ロケットの脇の小型のものがなく、ロケット本体だけの打ち上げが初めてで不思議でした」と話していました。

また、愛知県から訪れた40代の男性は、これまで打ち上げを5、6回、見ているということで、「いつもの打ち上げと違う感じがして不思議でしたが、幻想的な雰囲気も感じました」と話していました。

打ち上げ計画は



新形態は炎の見え方や聞こえ方に違いが

今回打ち上げられたH3ロケットの新形態「30形態」は、補助ロケットを取り付けずに打ち上げられたため、これまでの形態に比べて、ロケットから出る炎の見え方や音の聞こえ方に違いがあったということです。

打ち上げ成功後に取材に応じたJAXAの有田誠プロジェクトマネージャによりますと、今回の打ち上げを見た人からは「透明な炎が見えた」といった声が多く聞かれたということです。

そのように見えた理由について有田プロジェクトマネージャは「補助ロケットは中に含まれる固体燃料の組成上、白い煙を出していくが、液体水素や液体酸素が燃料のメインエンジンは水蒸気が出るため基本的に炎が透明に見える」と説明しました。

また「打ち上げ時の音を大きく感じた」という声も多く聞かれたということで、これについて有田プロジェクトマネージャは「音は多くの噴煙を出す補助ロケットの方が大きいと考えられがちだが、実はメインエンジンの方が理論上、音が大きい設計となっている。理論で想定されていたことが正しかったことに驚いた」と述べました。

そして、自分自身は管制室にいて炎や音を直接感じていないとして「本当は私自身がいちばん体感したい」などと笑顔で話していました。

高市首相「ロケット打ち上げ能力をさらに高めていく」



12日夕方、総理大臣官邸では、高市総理大臣や関係閣僚らが出席し、今後の宇宙政策を議論する「宇宙開発戦略本部」が開かれました。

この中で、高市総理大臣が「H3」の6号機の打ち上げが成功したことを報告すると、出席者から拍手が起きました。

そして、高市総理大臣は「たくさんの方々の尽力に感謝申し上げる。国内外の打ち上げ需要に応えるため、ロケット打ち上げ能力をさらに高めていく」と述べました。

注目ワード

宇宙

サイエンス

鹿児島県

ニュースクローズアップ

あわせて読みたい
